

1975年2月28日第3種郵便物認可 1992年10月15日発行

毎月1回 15日発行
定価/150円
年間購読料/2,000円
(送料共)

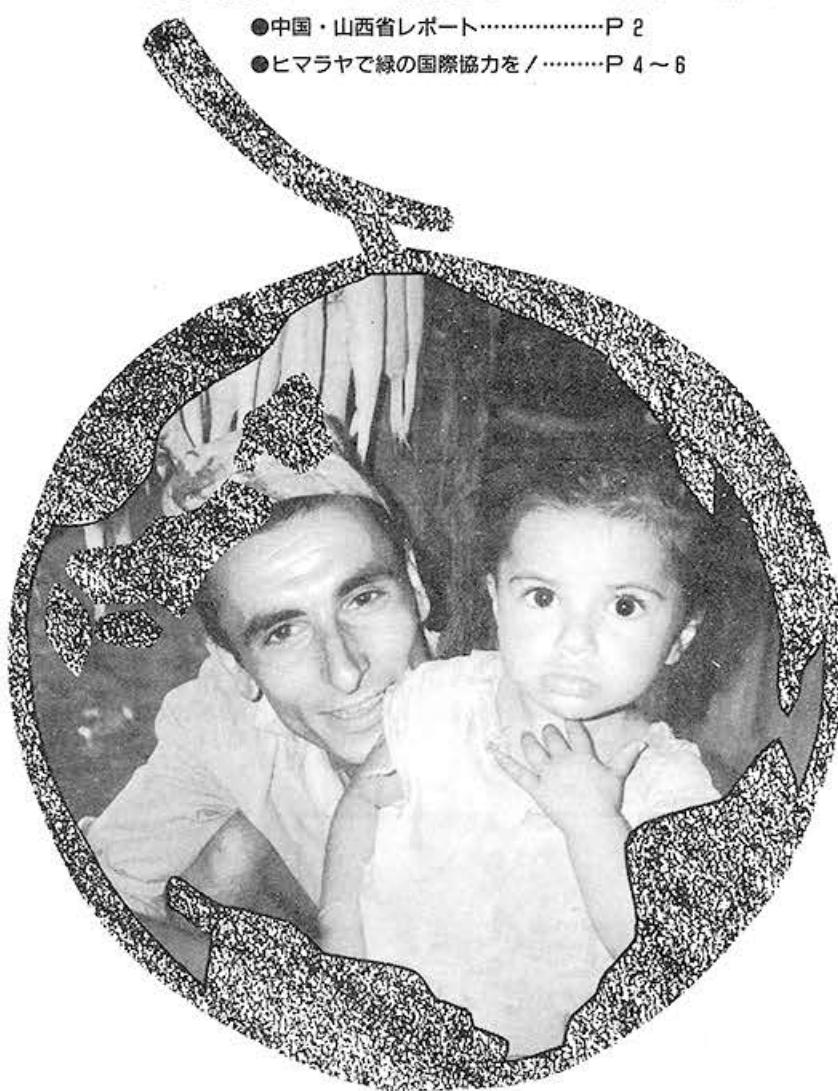
編集/緑の地球ネットワーク(準)
Green Earth Network

大阪市港区市岡元町3丁目9-16 西建ビル
TEL.06-583-1719 FAX.06-583-1739(番552)
郵便振替 大阪 4-128465
COM21 通巻303号 発行/COM企画室

緑の地球 GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

- 中国・山西省レポート……………P 2
- ヒマラヤで緑の国際協力を／……………P 4～6



1992・10

9

中国・山西省からのレポート 緑化にかける人びとの希望

縁の地球ネットワーク（準）世話人 高見邦雄

まぢかに迫った冬の訪れに追いかけられながら（10月6日には初雪がありました）、渾源の農民たちは収穫に大忙しです。黄金色のトウモロコシの山が畑のあちこちにくっきりと見え、土壁に囲まれた家々の庭やヤオトン（窑洞）の屋根に、アワ、キビ、コーリャン、マメ、ナタネ、ヒマワリなどが干してあります。子どもたちもりっぱな働き手ですから、村の学校は10月10日まで農繁休暇、そのぶん夏休みがみじかかったのです。

今回は、くるなり西留郷政府の事務所（といっても農家と似たつくりで、オンドルがあります）に泊まりこんで、県北部の村をいくつか回りました。はじめは遠まきにして笑っているだけの子どもたちも、すぐうちとけて、手をつないで村の中を案内してくれます。

食事どきになると、村の農家に入りこみます。ジャガイモを主体に、雑穀の料理やツケモノがならび、遠来の客のためにヤギやニワトリが犠牲になります。男たちはオンドルに車座になり、50度をこえるコーリャン酒（500ccでなんと45円！）で「乾杯」のくりかえし。

丘陵地帯の村の生活は、50年代の日本の農村で育った私がみてもびっくり

するほどに厳しいものです。今年は夏の終わりから秋にかけて雨が多く、作柄は平年なみかそれ以下だったようですが、それでも、そこに生きる人びとは悠然とかまえています。

この一帯の農家にとって、最大の問題は水土流失です。遠くまで広がっているようにみえる大地でも、突如、脚のすくむ垂直の裂け目が口をあけます。どれほどの土壌が、作物や肥料といっしょに流れたことでしょうか。

人びとの希望は綠化にかけられています。「植樹百株十年后万元戸」(木を100本植えれば10年後は万元戸)のスローガンも、この現実をみると、そ

の切実さがよくわかります。アンズ、リンゴ、ナシなどの「経済林」を緑化の推進力とし、あわせて松類で生態環境の回復をはかるのは、周到な、理にかなったやり方でしょう。

西留郷の「友誼林」に植えられた樟子松も、仁同杏も、りっぱに根づき、成長しています。この地域の人びとが、私たちとの「合作」をどんなに大切に思っているか、「友誼林」について語るときの表情からひしひしと伝わってきます。

明日から桑干河青年緑化プロジェクトをみて、もう一度、渾源にもどる予定です。



日资“绿色组织”与新区合作开展绿化活动

本署讯，在中日邦交正常化二十周年之际，驻日本大使馆民便会客团长石原忠一为团长的日本“第一次中国绿化协力团”一行7人，5月11日至5月14日在我国进行了为期4天的考察。并与当地团员青年一起参加了植树活动。日本朋友还深入桑干河沿岸林地，认真细致地考察了桑干河青年林的建设情况。

在浑源县，举行了关于日本烟向浑源县捐赠款项的仪式，省青联及我地区、吕梁团组织和林业部门的负责同志参加了捐赠仪式。石原亮一先生代表日本绿色地球同盟烟组向浑源县捐赠人民币9万元，专项资助浑源青年工程林建设。据了解，这些款项全部来源于日本民间捐助，在捐赠期间，日本朋友还曾对浑源的自然风光、风土人情等进行了考察。

日本「緑色組織」と我区とが協同して緑化活動を展開
[本紙発]

中日国交正常化20周年に際して、日本国大阪府から石原忠一氏を団長とする「第一次中国緑化協力団」一行7名が、5月11日から5月14日まで、雁北地区で4日間の協同の緑化活動を行いました。

渾源県では、日本から渾源県に対する協力金の贈呈式が行われました。省青年連合会と地区・県の共青団と林業部の責任者が出席しました。石原忠一氏は、日本緑の地球ネットワークを代表し、渾源

県に対して、主に県の青年プロジェクト林建設の支援を中心とする協力資金人民幣9万元を贈りました。これらすべての協力金は日本の民衆の理解に基づいた寄付によるもので、

渾源に滞在中、日本の友人は渾源県西留郷の「中日友好青年林」を参観し、現地の共青団、青年といっしょに植樹作業に参加しました。日本の友人はさらに桑干河沿岸の植樹地にも深く入り、桑干河青年林の建設の状況を熱心にそして詳細に参観考察しました。(解説)

GEN講演会 環境NGOが元気になる話 柳田耕一さん（緑の地球防衛基金事務局長）

●と き／11月10日（火）午後6時30分～
●ところ／アピオ大阪（大阪市立図書館）

云鬱力立市府（大阪市立公園）
（環状線・地下鉄「森の宮」下車すぐ、電 06-041-6322）

參加費／700円

主催／緑の地球ネットワーク（準）

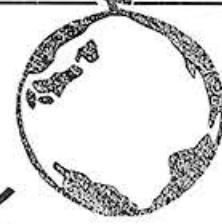
テレカ 絵ハガキ おわびとお知らせ

「黄土高原に緑を！」のテレホンカードと絵ハガキの販売協力を呼びかけていましたが、予期せぬ事態で作成が遅れ、テレカについては計画を中止し、絵ハガキについては再度態勢を整え11月初めには完成させたいと思います。

すでに郵便振替等で申し込みをいただいている方も多数おられるのにもかかわらず、当初の計画を実行できませんでしたことを心からおわびいたします。今後ともよろしくお願いします。

ネパール帰国報告会

厳しい社会・ 自然環境の現状を聞く



9月22日、港区民センターでGEN代表世話人佐野茂樹さんによる「ネパール、森林破壊の現状と緑化への道」と題した定例講座が開かれました。7月28日から8月18日まで、雨期のネパールで現地の若者たちと交流、確認してきた事、及びネパールの一般的な諸事情について興味深い報告がされ、活発な質疑応答もありました。

とはいものの、実は後から佐野さんにうかがったところ、「100回に3回ぐらいの失敗」という事で、そういうえばいつものさわやかな弁舌ではなかったかな、と。でも私は佐野さんは今回ネパールに泳ぎにいってこられたのだと思っていたので（え、違いました？　だってあんまり楽しそうに「2回も泳いできたよ。2回目は雨が降ってね」なんておっしゃっていたので）、きちんと仕事をされていたんだと認識を改めました。

ネパールといえば登山家のメッカ、グルカ兵のふるさと、ぐらいのイメー

ジしかなかったのですが、平均寿命が54歳、乳児死亡率が10%以上、首都カトマンズさえ上水道が各家庭にまで通っていないこと、など厳しい現実を知りました。

そんなところに木を植えることがどんな意味を持つのか？　ネパールでは木は燃料にされます。熱源のなんと75%が薪。植えても植えても切り倒して薪になるわけですが、かといって植えずに放っておけば木は失われるばかり、土壤もどんどん流されてしまします。木、草を植えて熱源、土壤の確保

をはかりながら新たなエネルギー源を探さなくてはなりません。

すでに地元でしっかりしたプランのあった山西省にもまして、草の根から、地元の人の交流に基づいたまさに第一歩からの地道な努力が必要とされるでしょう。と厳しい現実にえりを正しながらも、「ネパールの女性は実際に働き者です」という佐野さんの言葉に、なまけ者の私はよくぞ日本に生まられてきたものだと内心ほつとしていたのでした。（東川）



パネルの展示始まりました。

「黄土高原に緑を！」のパネルの展示活動を始めました。

まず手始めに、9月19日・20日に部落解放センターで開催された「第3世界民衆フォーラム」に出展、少々「お客様」は少なかったものの、パネル16枚を展示した出来映えはなかなかのものでした。つづいて、第一次緑化協力団員の西山さんの紹介で、全通北大阪支部の定期大会で展示、各郵便局の支部で10月16日まで巡回展示をして



全通北大阪
大会で
10月3日

いただきます。

パネルの展示と同時に緑化基金への募金を呼びかけていますが、河内長野森林組合のご協力で、間伐材をつかった募金箱を現在制作中です。

秋は文化祭のシーズン。大阪外大等の学生有志による協力で、いくつかの大学・学園祭で展示される予定です。



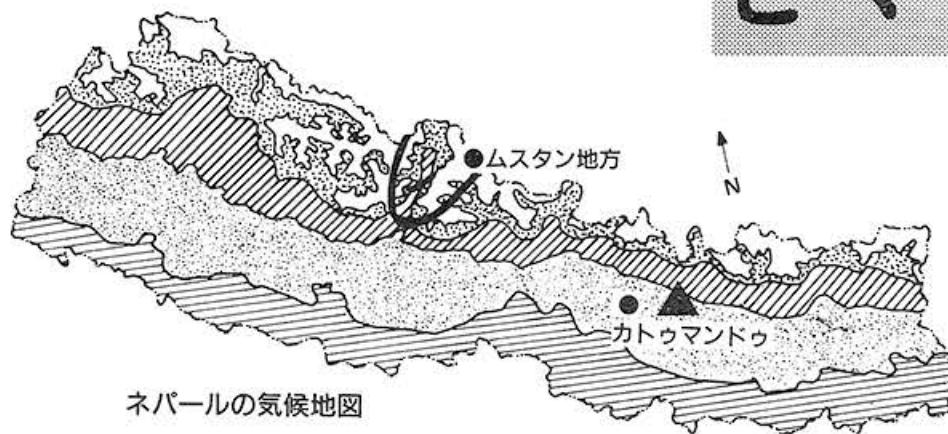
【パネル展示スケジュール】

- 10/30～11/3 大阪外大
 - 11/3～4 神戸女学院大（予定）
 - 11/19・20 大阪外語専門学校
 - 12/1～12 ピースおおさか
 - 1993年1月 北市民教養ルーム
- ※パネル展示にご協力を！

GEN 正式発足に向けて

GENの活動が始まって半年以上が経過し、国内外での活動は初步的ではあれ着実に進んでいます。これらの成果を基礎にGENの正式結成にむけた準備が具体的に始められています。世話人会では結成大会の内容、時期などを議論し、来春、結成記念は「アジアの環境問題」を巡るシンポジウムを開催することになりました。集会内容は以下のとおりです。

- 日時／1993年4月11日（予定）
- 会場／未定
- パネリスト／槌田劭さん・稻村昭南さん・石田紀雄さん・深尾葉子さん



ネパールの気候地図

この夏、ネパールを訪ねました。一年ぶり三度目のことです。以前から親しい農村出身の青年たちといっそう緊密に行動を共にしました。また、高原遊牧地帯・ムスタン地方の緑化に心を碎く長老と腹蔵なく話し合い、協力への確かな展望を開くことができました。

夏のネパールはモンスーン真只中です。国の九割もの人びとが住む農村では、田植など農繁期です。もちろん、観光はシーズン・オフです。あえて夏に行ったのは、ムスタンでの協力を進める応急の必要があったからですが、今後の未長いネパールとのつきあいを考えると積極的に夏場の水慣れ・生活慣れを求めてのことでした。いつも濡れ衣をまとっているような状態でしたが、幸いにも日を追って心身ともに快調でした。

テラス・フィールドの村で

滞在した村の一つは、ネパール三大水系の一つスン・コシ河上流の東部山中、標高1600メートル程の小散村です。カトウマンドゥから車で2時間、車を捨てて河越えをし、5時間山越えすると現れてきます。中部丘陵地帯



ネパールの仏教寺院。卒塔婆（ストゥーバ）。

ヒマラヤで緑の国際協力を！

緑の地球ネットワーク（準）代表世話人 佐野茂樹



▲は今回の訪問地

（標高1000～3000m）に典型的な、急傾斜の山腹を等高線沿いに刻んだテラス・フィールド（棚田）に驚かされます。一枚の田畠が狭く細く、二頭立ての牛耕がやっとのところもあります。

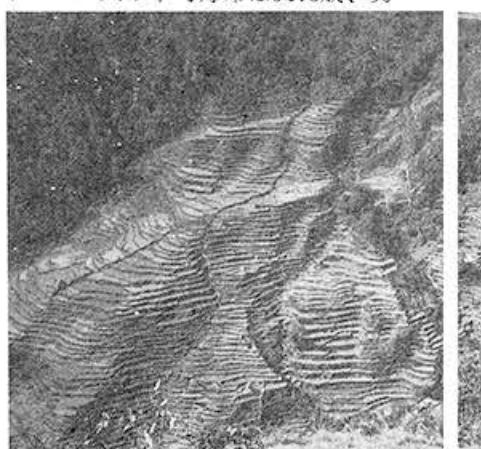
ここでの一週間、私は水牛の飼場に隣接する、牛、山羊小屋の二階に寝泊りしました。そして連日の雨の中草木の状態、田植えの様子、トウモロコシの取入れ、高い樹上に登って熟したマンゴの実を落とす様などを楽しみました。あちこちの水源を探り、水を味わいました。山羊をほふり解体し売る様も面白いものでした。夜ともなると灯油ランプのもと何人もの壯・青年とひざをつきあわせて話しこみました。この村の人びとは、食糧のほとんどを自給できる状態で丘陵地帯ではめぐまれていますが、何といっても幹線道路から遠く離れた移動・運搬（すべて人力）の困難と、電気のない非力さが問題です。農業以外の仕事口が村には全くありません。そんな中で、もっとも強く印象づけられたのは女性と子どもの働きです。

若い女性が乳呑子連れで実家の農繁応援に来ていきました。応援とはいって、農事家事とも主力の感があります。早朝五時前ともなるともう水牛・牛・山羊の世話を始めます。田植えに忙殺されている中でも、家畜にやる草を刈り、運び、やらなければなりません。山に行って木を伐り、背負って運びこみ、薪の用意もします。遠く離れた水源からは20キロを越える水運びが苦労の種でしょう。食事の用意や後

始末、さらに自分の子どもに授乳するのもむろんのことです。晴れ間が出るともなれば、洗たくにも励まねばなりません。

むろんもっと若く幼い子どもたち、とくに女児も働きます。女児労働をぬきにしては、農家の家政は成り立たないでしょう。こんなところに、重要なことがらが密みます。

給水協力から
ネパール人の平均寿命は54.3歳、男



55.7、女52.9歳。世界で例外的に女性の方が寿命が短い。この点に、女性の超重労働の日々と多くの場合その社会的地位の低さが現れているでしょう。農村女性は男より25パーセント長時間働くといわれます。子どもは6～9歳で日に3時間、10～14歳で5～6時間働き、女児は少年の二倍働きます。

田植えの終わる頃を見計らって八月の初めに新学期が始まります。始業式の日に訪ねました。やはり登校しているのは30人足らず、——三分の一程度

のこと、その内女児は10人でした。こうしたことでも反映して、成人識字率は35パーセント、しかし女性18パーセントです。けれども環境修復——とりわけ緑化という緊急でしかも永続的な重要事に、農村生活の主力をなう女性の参加がなければ決してうまくいかないでしょう。薪を運び、飼料となる草や柴を運ぶ仕事は女性の仕事の16パーセントを占めます。森林が衰弱すると、この仕事はますます過重となります。労働し自給するのに精いっぱいの日々の生活に、少しでも身心のゆとりをとりもどす生活の充実・家政の向上と結びつかない環境修復の道は険しいでしょう。

様々に話合ううち、焦点は水のことになりました。給水の便を良くする問題。一水源から遠くパイプを引いて、各住居の比較的近くに水栓を設ける



開墾される山々。限りなく続くテラス・フィールド。

——これは不十分ながら部分的に既設ですが。衛生と安定供給確保のため途中給水タンクを新設するなどの構想があります。十数家族 100人に充たぬ小集落を潤すにすぎませんが、家族総意、集落総意に支えられている以上、頑強に保持され、近隣に波及する勢いを持つでしょう。水は生命の源。その安定確保は緑の回復にむかう意欲を強めるでしょう。私はタンク設置に協力し、あわせて今後の協働活動拠点として借地と私の宿泊したのと全く同型の

小屋の建設に合意してもらいました。

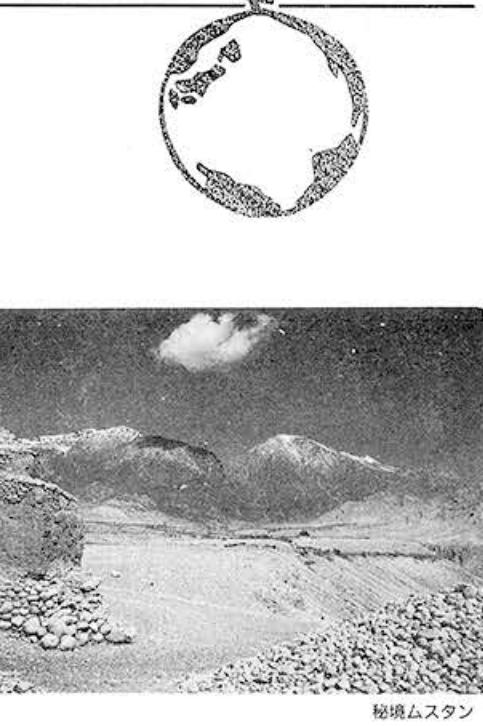
秘境ムスタン

こうした文字通り末端の草の根からのミニ協力の推進とともに、一歩ふみこんだのがヒマラヤ山脈に抱かれた北部の高原地帯——ごくわずかのオアシス農業と交易を除けば遊牧を主に生業とする地帶での植生回復協力の展望です。

たとえば、ネパール中央部に張り出しているアンナブルナ山塊の更に北方、チベットと接するムスタン地方。ここでは、進行する土漠化を阻み、家畜の生存資源・環境を生き生きととり戻すことはさし迫る課題です。この広大（3700平方キロ）な地域で草木の緑衣を回復することはまた、やはり三大水系の一つカリ・ガンダキ流域での水土流失に源流域から歯止めをかけることになります。

ネパールの水土流失とガンジス河の大洪水

ネパールのすべての河川は国境を越えてインドでガンジス河に流れこみます。ガンジス河はブラマプトラ河と合流して、しばしばバングラデッシュに大洪水災害をもたらします。そして毎年ベンガル湾に運びこむ土壤成分は30億トンに達します。ネパールからは毎年全表土平均 1.7mmに及ぶ2億4000万トンの土壤が失われます。ヒマラヤの山の若さによる不安定さや地形の険しさはあるとしても、雨期に集中するモンスーンを（ネパールの平均雨量は年1600mm）タップリと保持するに足る森林・草木があまりにも少なすぎるのです。（E S C A P=国連アジア太平洋経済社会委員会の統計によれば、森林率は17パーセント=1991年）。農業国ネパールの水土流失——土壤劣化は、直ちに生存条件の衰亡につながります。森林が急速に減ること自体、他のことはさておくとしても、欠かせない生存資源——熱源である薪の入手困難を招きます。（今、ネパールで



秘境ムスタン

の全熱源の四分三以上が薪です）。

ネパール森林事情

最近の伐採用途のほとんどは、薪需要を充たすためのものです。（1979年統計では、総伐採中、薪用に1724万立方メートル、残りの用材用に56万立方メートルです）。

1979年以降毎年 1.2万ヘクタールが伐られています。以前は、入植のためのジャングル開拓が大きな比重を占めました。1965年～79年に年平均 7万ヘクタールが伐られたのは、南方のタライ（平原）のジャングル開発に因ります。もともと農業生産の主力地帯であった中央部丘陵地帯の人口増加、きびしい傾斜をもつテラス・フィールドの土壤劣化、土地なし農民対策とから、マラリア制圧にも助けられて、南部亜熱帯のジャングルに、計画的大規模開発—耕地化が進められたからです。もちろん、用材用や輸出用の伐採も、今より大きな比重を占めました。

今、政府プランでは、2000年までに125万8千ヘクタールに植林し、増大続ける薪需要に備えようとしています。しかし、毎年実績は5千ヘクタールほどで、伐採面積の半分に及びません。これでは、生存に欠かせない資源と環境である森林を食いつぶすだけではなく、いたずらに土と水を失い続けることになります。

人口増——薪のための森林伐採
<次頁に続く>

水土流失激化、また、人口増食糧—生産増のための耕地拡大＝森林伐採、それが土壤劣化をもたらすという悪矛盾に陥ってしまっているようです。この悪矛盾を断つキイ・ポイントは、積極的な植林による森林再生の促進です。ネパールのどこの地域でも、植林は不可欠でしょう。そして、草の根からの立ちあがりとそこに結びつく国際協力とが、決定的な要素でしょう。

植林困難な植林条件

地方の公的機関の有力者でもある長老は環境悪化に悶えるムスタン地方の植生回復の必要を切々と語りました。

ムスタン地方には、大阪府の約2倍の広さに約3万の人びとがすんでいます。極端な乾燥地帯、年雨量は、奥地では200ミリメートルそこそく。大変に人口希薄ですが、もともと厳しい環境であることからすれば当然のことでしょう。そして、このような生存限界すれすれのところに、古来すぐれた文化が育ち、たくましく人びとは生きてきました。この限界的な環境すらもが植生をうしなうことによって更に劣化し破綻しつつあるのは、まさに危機です。人びとはここで生きなければなら

ず、ネパールのどこにも受け入れる余地はありません。植生回復による環境再生は、生存をかけた闘いです。そして、自然条件からすれば、植生回復は著しく困難です。しかし、あえてこの困難に挑もうではありませんか。

草の根ネットワークを

長老の態度は大変示唆に富んでいました。彼は土漠化の原因、過去の大援助プロジェクトの失敗などについて、あえて結論をいいません。私たち自らが実地に調査し、しかも現地の村の人びとと共に確かめてほしい、と。これは重要なことです。植林の自然条件が厳しければ厳しいほど、植林に向かう草の根の人びとの熱意、実力、永続性がなければなりません。これらを私たちが、計画・着手以前の調査段階から共有することが肝要です。緊要なことであればあるほど、綿密な調査に立脚したいのです。来年6月には、調査団を派遣したく思います。

(ムスタンについて、くわしくは別の機会に記します。)

13年前から現地レヴェルでムスタン緑化を模索してきた「アジア自然塾」の稻村昭南さんは次のように記してい



ネパールの女性

ます。

「(ムスタン奥地には、ネパール中央部の)基点ポカラからはヒマラヤの谷間を歩いて片道15日。途中、山全体を覆う山ヒルの群を抜け、ダニ、南京虫などの害虫と戦いながらの旅となります。ネパールでは本当に助けを必要とする場所はこういう所なのです」

(「アジア自然塾通信」)

稻村さんとはすでに親密な協力関係にあります。日本でのネットワーク、現地とのネットワーク、この前進が壮絶な困難な中での希望です。

山西省の自然

石原忠一
(第一次緑化協力団団長)

③油松

山西省渾源県の県都から南東わずか5kmのところに、中国の五岳信仰の聖山として名高い北岳・恒山(2017m)が美しい姿を横たえています。麓一帯の渾河流域が1000mをこえる高原なので、身近で、やさしくしかも威厳をそなえています。

この山の中腹に、傘状の古松が幾百星霜の嵐に耐えて、私たちを温かくむかえてくれます。この大木の存在が、このあたり一面に、かつて森林があつたことを雄弁にものがたっています。しかも原生林の伐られた跡の二次林の生き残りかと思われます。

中国の文明を育んだこの地は、5000年の人間の営みによって、天災や、權



力者の収奪や、度重なる戦乱によっ

て、わずかな聖地を残して、森林を限りなく追いつめ、ついに耕して天辺に至ったのでした。そして今、中国青年連合会の皆さんのが決定した、大いなる緑の復活の希望に言いしれぬ共感をおぼえるのです。

関西でおなじみの松は、正月の門松で親しんできた雄(クロマツ)と雌(アカマツ)ですが、中国科学院の編集した植物図鑑には14種が記載されています。その説明によりますと、種子に30~40%の油を含み、食用や工業用に供されるとあり、「油松」(ユースン)と呼ばれてきたゆえんでしょう。

私たちは、恒山参詣者がいちばん集まってくる展望棟のすぐ近くに、林業局の準備してくださった、根もとの土をこもで巻いた十年ものの立派な油松の苗を、両国友人同士で大騒ぎをして喜びながら、地球環境林として植樹させていただきました。

市外電話で環境保護 エコロジー・ダイヤル

環境問題に关心をよせる企業が日本でもようやくふえつつありますが、紹介するのは市民団体がタイアップしてすすめる「エコロジー・ダイヤル」。

長距離電話をかけるとき、新電電を経由すればかなり割安になりますが、「エコロジー・ダイヤル」はそれに環境保護をプラス。ジャパンエコロジーセンターが第2電電(DDI)と提携して開設したもので、あらかじめ「エコロジー・ダイヤル」に登録した電話で、市外電話をかけると、通話料金の1%が環境保護団体への基金になります。

最初の登録に2000円かかりますが

(新電電に登録する必要なし)、月々の基本料金はありません。市外局番のまえに「0077」のアクセス番号をまわすだけで利用でき(事業所等なら自動選択のアダプターを無料設置)、あとで使用に応じた環境基金が自動的に積み立てられます。

しらずしらずのうちに環境保護に協力できますので、みなさんのご利用をおすすめします。

申込みと問い合わせは

■162-00 東京都新宿区袋町3番地
エコロジーセンタービル
ジャパンエコロジーセンター

美しい地球が大好きだから
エコロジーダイヤルにしました



エコロジーダイヤル係

☎ 03-5228-3377

『GEN朝まで討論会』のお知らせ

緑の地球ネットワーク(準)は、地球環境のための国境をこえた民衆の協力をスローガンにしています。

ところで、地球環境とはいっていいのでしょうか? 環境を辞書で調べると、「それを取り巻く、まわりの状況」と書いてありました。「それ」というのは、この場合「人間」のことだと私は思っていますが、「人間だけを中心と考えるのが間違いのもとだ。人間を含む生物全体にとっての環境を考えなければならない。」と反論する人がいるかもしれません。

同じスローガンで集まっていても、

一人一人の想いは微妙に(時には大きく)違っているものです。私たちのネットワークに集まっている人びとも、いろんな考え方を持っていることでしょう。

考え方を統一しようと無謀なことは思わないほうがいいでしょうが、いろんな考えをぶつけ合うことは、お互いのためにも、今後の活動のためにも、たいへん有益なことだと思います。中国山西省の渾源県等で国境をこえた民衆の協力が具体化し始めていたとき、その意味を考えるためにも、幅広く、奥深く、いろんな問題をじっくり

りと話し合いたいものです。一度では討論し尽くせないでしょうから、今後の学習と討論の計画も相談したいと思います。ぜひ、お集まりください。

参加希望者は、12月9日までに事務局までご連絡ください。

〈場所〉 日中友好の家(阪急宝塚線「山本」下車5分)

☎ 0797(88)2240

〈日時〉 12月12日(土)午後3時
~12月13日(日)正午

〈費用〉 実費

※呼びかけ 川島和義(GEN会話人)

編集後記

●駅への道で、キンモクセイの香に足が止まりました。この木の遠い先祖ははるばる中国から来たんだな、とちょっぴりもの思いの秋でした。(東川貴子)



●10月になると、昼は涼風、夜は虫の音と、何かにつけてしんみりしたものを、感じるようになりました。

視覚・聴覚・嗅覚に味覚に…と、め

いっぱい体に訴えてくる日本の秋は、やはり素晴らしい。(加茂わかかな)

●わからんことばかりで、しんどかったです。(はたちこうじ)

●ひさしぶりに8月の緑化協力団の団員が写真交換会を名目に? 集まりました。鶴橋のとっても美味しい焼き肉店でたらふく食ってワイワイやりました。今回の訪中の文集をつくることになりましたので、完成したら見てください。つぎなる計画は早めの忘年会とか。末ながいおつきあいをしたいものですね。(林)

●『緑の地球』の表紙デザインが今月号から変わりました。プロのデザイナーの協力でスッキリとアカ抜けしたものになりました。今のところ来年のGEN正式発足までのリリーフ登板の予定ですが、反響がよければ続投になるかも…。

